

事例報告
オンライン同期授業への日本語話者ボランティア受け入れの試み

Case Report:
Experiments with Integrating Japanese Speaking Volunteers into Synchronous Online Classes

シャープ昭子, カルガリー大学
Akiko Sharp, University of Calgary

1. はじめに

新型コロナの影響で多くの学生が計画していた留学をキャンセルせざるを得ない状況になり、先が見通しにくい日が続いている。対面を前提に日常化していた学生同士の国際交流の多くは、立ち消えになっているのが現状であろう。発表者は、海外渡航の制限がある場合には、国境を超えた自発的交流を学生に期待するのは非現実的であり、教師側から、何らかの仕掛けが不可欠であろうと考え、閉ざされたまま、仕方がないと諦めて日々過ごすのではなく、オンラインだからできることをやってみることが重要ではないかとの考えに至った。そして、学生同士の学びの場を作る方法を探り、2021年5月にバーチャルエクスチェンジプログラムを実施することにした。

しかし、バーチャルエクスチェンジと言っても、日本とカナダの学生がオンライン上でどのような行動をし、どんな問題が起きるのかは想像する以外になく、実施を決意した2020年秋の時点で、すぐに参考になるような文献も手に入れることができなかった。「日本語話者がカナダの日本語クラスに参加することになったら、どんなことが起きるのか。」その答えを知るために、そして、バーチャルエクスチェンジプログラムの内容を決定するために、発表者は、日本の学生を発表者の日本語クラスにボランティアとして参加してもらおうという計画を立てた。

本発表は、そのプログラムのための準備として、カナダの日本語クラスに日本在住の日本語話者の学生ボランティアを招いた事例報告である。語学クラスに日本語話者をボランティアとして招待したいと考えている方の参考になれば幸甚である。

3. 目的・背景

海外の日本語のクラスに日本人の学生に参加してもらおうということは、海外で教えている教員の間では、たびたび、話題になるトピックであった。日本側も日本語教師養成課程がある大学などでも、そのような機会を望んでいることは容易に想像できた。しかし、まず、授業で追われる教員に選抜に関わる雑用をお願いすることは難しく、大学のインターナショナルオフィスなど、事務関係の担当者や教員が連携できる体制が望まれた。そして、時差が大きな壁となった。カナダの日中の授業は、日本時間では真夜中になり、そのような時間帯に日本の学生が授業に来てくれることは考えにくかった。幸い、清泉女学院大学で英語の教鞭を取っている、元同僚であり、30年来の友人が、海外留学担当で事務担当者として密

接の仕事をしていた関係もあり、嘆きに近い最初のメールから 24 時間後には、具体的な質問リストが届き、話が進みはじめた。

3.1 共通目的

カルガリー大学と清泉女学院大学の担当者とのやりとりで、この交流の目的は以下のように決めた。

1. コロナにより移動はできないが、オンラインだからこそできる国際交流・学習体験を通して、異国の学生と関わる意義について考えさせる。
2. ターゲット言語（日本語・英語）を使って、コミュニケーションする機会を作る。

以上の共通目的をベースに双方が、どのような目的を設定したのかを、以下にまとめる。

3.2 日本側、カナダ側、それぞれの考え

日本側からは、以下のような目的が提示された。

1. カナダの日本語クラスに参加して、日本の国外の日本語の授業と異文化を体験する。
2. 英語話者と、英語を使う機会を持つ。

海外の語学コース留学では英語学習者との会話が多いので、海外留学とは別の形で学びが期待されるのではないか。というのが、英語教師である友人と元英語教師である私の共通理解であり、もっとも期待されることであった。

海外への短期の語学留学では、ホームステイで英語話者との接触はあるものの、英語のクラスでは、英語を勉強している人との接触がほとんどで、英語を使って生きている人との接触場面は想像より少ない。そして、現実的には、日本人が多くいるクラスで、日本語を使わないことを意識して、英語を学ぶという形にならざるを得ない。この件については、本発表とは関係がないので、別の機会に議論することにしたい。

日本語話者が海外の日本語クラスに入った場合、どのような言語活動が行われるのかは想像するしかないが、ブレイクアウトルームで、カナダの学生と対面したら、きっと英語を使う機会があり、それが日本の学生たちの心に大きな変化をもたらすであろうと私達は想像した。

受け入れ側のカナダとしては、以下のような目的を設定した。

1. 日本語話者と日本語を使ってコミュニケーションしてみる。
2. 日本語話者との交流を通じて、日本の現在を知る。
3. 日本語話者に、文法、発音、新しい言葉などを教えてもらう。

学生は特に、日本の大学生たちは、どのように毎日を過ごしているのだろうかということに関心があり、ぜひ、聞いてみたいという声があちこちで上がった。そして、何より、日本人と話してみたい。日本にいる人に自分の日本語がわかってもらえるのかを知りたいという強い願望があった。

実施するにあたって、心配されることがいくつかあった。まず、海外との交流をというものを考えた時、双方の学生の目的が一致するかという問題である。日本語を学ぶ学生が、日本語を話したいと思っているのに、日本の学生が英語を使う機会を持ちたくて、英語を使ってしまわないだろうかという懸念である。海外で日本語を学んでいる学生が、どんな日本語を話すのか。それは、日本でクラス普通の日本人にとっては、想像を超えたものであろうと予想された。そして、日本の学生がどのくらい英語を使えるのかは、学生それぞれであらうし、全く未知の世界であった。いきなり、日本語の文法を英語で説明するのはおそらく無理で、それをどのように乗り切るのだろうか。ブレイクアウトルームという特殊な環境で、学生たちがそれぞれの未知の問題をどのように解決していくのだろうか。実施することを決めたものの、どんなことが起きても、きっと興味深い経験を持つことができるであらうという、最低限の共通理解を持って、準備に入った。

2. 参加人数と実施したクラス

カルガリー大学は、発表者が担当した日本語クラス 3 クラス（合計 84 名）に日本人ボランティアが入った。対象クラスは、日本語学習 2 年目の後半で、「げんき」第二巻（L18～）を使っているクラスが 2 クラス、上級日本語会話（まるごと B1）のクラスであった。清泉女学院大学からは、心理学科、コミュニケーション学科の 1 年生から 4 年生までの学生、19 名が授業に参加した。

実施期間は 2021 年 2 月 23 日から 3 月 27 日とした。授業は月、水、金の週三日の同期授業で、合計 15 回とし、日本側は、2 回以上参加可能な学生を募集した。授業は日本時間の午前 2 時、4 時、5 時（夏時間への移行後は午前 1 時、3 時、4 時）で、日本の学生にとっては過酷な時間であったが、合計 19 名が日本から参加し、Zoom の同期授業でカナダの学生と時間を共有し、日本語学習のサポートをしてくれた。

夜中から早朝の授業なのに、なぜ 19 人もの日本の学生がクラスに来てくれたのか。これは、カルガリー大学の学生からの大きな疑問であった。理由としては、まず、コロナ禍で、海外へ出られないことがある程度ははっきりしている時期で、海外との接触を望む学生が多かったのではないかと、私達は考えている。そして、もう一つ、清泉女学院大学には、ボランティア活動クレジットというシステムがあり、この活動も大学での記録に残せることが挙げられる。これは、カルガリー大学側にも言えることで、カルガリー大学では CCR (Co-Curricular Record) というシステムで、ボランティアや文化活動が記録として残せることになっており、そのためにサポートのボランティアが集まりやすかったという事情があったことは、特記しておきたい。

4. 事前準備

清泉女学院大学の国際交流課が 2 月初旬に募集を開始し、一週間余りで 19 名の募集があった。日本の学生がクラスで一人ぼっちになってしまうことを避けるため、カルガリー大学の学生のサポートボランティアを募集し、3 つのクラスから 13 名の希望があった。

コミュニケーションは、SlackとLINEを使った。Google クラスルームを予定したが、清泉がGoogle クラスルームを大学の授業で使っており、セキュリティの都合で、私達カルガリー大学が、アカウントにアクセスすることができなかった。おそらく、専門知識がある人が関わっていれば解決できたかもしれないが、望んでもできないことはさっさと切り捨て、他の方法を探すということで、できるだけストレスを減らすことに努めた。代案として、ファイルシェアも共有できるSlackを使用することにしたが、手間取ったため、Slackに入るためにLINEを設定した。Slackは、クラス別のチャンネルを設定できたので、情報を共有するのにとても便利であった。

参加者を対象に、2月16日にオリエンテーションを実施した。オリエンテーションは録画し、参加できなかった数名は録画を見てもらうことにした。

5.2 授業中の活動内容と気づき

日本語の通常クラスは、「反転授業」を意識して展開してきた。発表者は、「反転授業」はオンラインになってから導入しているため、どの程度効果的な授業をしているのかは、別の機会を持って、検証する必要があると感じている。しかし、学生の出席率は概ね80%以上で、顔を全員が出しているわけではないが、反応があることを考えると、通常の授業の満足度は低いわけではなさそうである。

ボランティアを受け入れて、より多くの活動を限られた時間でさせるために、反転授業をある程度導入しておくことは不可欠であろう。授業中に文法の説明をしているのでは、ボランティアは暇であろうし、オンラインで一方向的に話すだけの授業では、授業を聞いているはずの学生も途中でどこへいってしまうのか、わからないからである。

授業では、ブレイクアウトルームで、日本とカナダの学生の接触場面を増やすように努めた。授業では、以下のような活動をした。

- 会話練習（授業の最初に必ず時間を作った）
- アクティビティ
 - Google slides（文法練習、宿題の確認、など）
 - Jam board（漢字、読解、など）
 - Padlet（プレゼンテーションリンクの公開、コメント、など）
 - Wheels of names（毎日の会話のテーマ、など）
- 音読練習のサポート
 - 初級後半クラス：「げんき」第2巻 読み物 「猫の皿」
 - 「まるごと B2」

前述したように、対象クラスは3クラス、活動は15回で、参加学生はカナダの学生が32人が2クラス、20人が1クラスであった。日本からのボランティアの学生は19人であった。出席率は、ボランティアが入ることになってもほぼ変化はなく、初級後半は80%から90%で、上級会話クラスは、毎回、ほぼ欠席ゼロであった。ここでは、授業中の活動記録から、気づいたことをまとめておきたい。

興奮の中で迎えた初日であったが、終了後、ブレイクアウトルームに入った際、やることがわからなかったり、沈黙が続いてしまうことが学生のコメントからわかった。改善策として、ブレイクアウトルームに移動した後、zoomのスクリーンシェアを使ってファイルを共有し、グループになった後でもやることははっきりわかるように努めた。これにより、何をやるのか確認する作業がなくなったためか、効果的に時間が使えたようである。また、制限時間を明確にすることで、活動にメリハリがつくようにした。日本からの学生との接触が持てたグループの学生の満足度は高かったが、接触を持てなかった学生が出てしまったことが終了後にわかり、ブレイクアウトルームを作る際に考慮が必要であることがわかった。また、活動を多く計画したため、それぞれの活動時間が短すぎて、半端に終わってしまうことがあり、時間配分について再考する必要性を感じている。

上級会話クラスは、予想通り、ほぼ日本語だけの会話が成り立ち、日本の学生からは、感嘆の声がよく聞かれた。使用教科書が「まるごと B1」であったため、教科書の課題をこなすことが自然にコミュニケーションを生む流れになっていたため、緊張という壁を乗り越えられれば、日本語話者が効果的にクラスに参加できることを痛感した。上級レベルのクラスは、日本人がボランティアとして入ることを前提に、オンラインで展開する方が効果的に日本語の会話力がつけられるのではないかと思う場面が多々あった。

クラス活動をする際、教科書が必要な場面があったが、カルガリー大学のボランティアが教科書の必要なページを写真に撮り、すぐに Slack で共有できたので、教科書の共有という問題は解決できた。その他、授業中に、質問がある際にも、Slack や LINE を使って学生同士で問題解決をしたとの報告があった。思い返してみると、最初の数日は、日本の学生からの、zoom が落ちてしまったお詫びや、授業に関するお尋ねのメールが毎日のように届き、不安を覚えるほどメールの数が増えてしまったが、slack がうまく使えるようになり、そして、LINE での連絡も安定してきた 1 週目の終わり頃からは、驚くほど平穏な日々が流れていた。Slack では、リアクションボタンがあるとコミュニケーションが変わると実感し、私自身も大変勉強になった。Zoom 以外に、1 つか 2 つ、連絡方法を確保できるツールを準備しておくことは必要不可欠だと言えるであろう。

6. 成果と考察

日本の学生からは、毎回参加後に振り返りを google form に記入してもらい、のべ 96 人の記録をとった。カルガリー大学の学生は、学期を通して課されている週末の振り返りに日本語で振り返りを日本語で書いてもらった。そのほかに、無記名で、Google フォームを使って感想を聞いてみた。

日本からのボランティア学生からは、初回は、戸惑いと失敗の記録が多かったが、回数を重ねるに従い積極的に発言できたというコメントが散見されるようになり、満足感を感じたことがわかった。予想されたことであるが、カルガリー大学の学生から、日本の文化、日本語に関する質問があり、日本文化の理解とそれを説明するだけの知識と英語力をつけることの重要性を痛感したというコメントが複数あった。また、初級後半のクラスでは、英語を使う機会が多かった

らしく、英語を使ってコミュニケーションできるようになりたいというコメントが多く見られた。初級後半とはいえ、やはり、英語でのやりとりが多くあったことがわかった。4年目の上級日本語会話のクラスでは、効果的に日本語でのコミュニケーションが成り立った様子であった。一般的な日本の大学生の英語力を考えると、海外の日本語上級レベルのクラスの学生とであれば、バイリンガルでの協働学習が可能であるとの感触を得られたのは収穫であった。

カルガリー大学の学生は、日本の学生と交流する機会を楽しみにしていた。そして、音読練習では、コメントをもらえることにとっても感謝していた。現実問題として、音声の指導をクラスでする時間があまり持てないので、音読練習をすることで、教科書もスムーズに読めるようになることがわかった。「げんき」の教科書にある、「猫の皿」は、ボイスレコーディングという、録音の課題であったが、録音のための練習がクラスでできたことで、学生の漢字の認識レベルも上がり、また、何より、教科書がどんどん読めるようになるという満足感を感じた学生が多かったのが印象的であった。日本人との接触で、日本への思いを強くした学生も多く、もっと話をして日本のことを知りたいというコメントは多数あった。そして最後に、自分の日本語が通じた喜びを語る学生が多く、設定された場面での限られた文法事項を使うことを前提に設定された会話練習を超えた、コミュニケーションが持てたことの満足感はとても高かった。

7. まとめと今後の展望

発表者は、カルガリー大学で 2003 年から日本語を教えている。これまでに初級から上級まで、130 コース以上教えてきた。カルガリー大学の前の教師経験（高校英語教師、海外の日本の補習授業校、日本語学校など）を含めると、教師経験年数は 30 年余りになる。しかし、オンライン授業は、2020 年の時点では初心者である。そんな私が、新型コロナの影響で、3 日で対面からオンラインに授業を移行し、ほぼ強制的にオンライン授業を「させられる」ことになった。そして、2020 年春に 1 コース、秋に 3 コース、冬に 3 コース、そしてバーチャルエクステンションで 2 コースの合計 9 コースを教えた。2020 年のコロナによるオンライン授業への移行から数えると、オンライン同期の授業の経験時間数は、350 時間以上になる。この時間数が多いのか少ないのかの議論は別の機会に持つことにして、350 時間あまりを zoom で学生と過ごした今言えるのは、「オンラインでも語学は教えられるし、学べる」と、私自身が感じていることである。これは、私には革命に等しいくらいの変化と言ってもいいと思っている。しかし、対面授業を否定してはいないことは追記しておきたい。

日本の学生を、オンラインクラスに受け入れるという計画と必要性を感じていたものの、実際にできるかどうか、2021 年の冬のクラスのスケジュールを決めた時点では決定しておらず、日本からの学生との活動のための時間を授業に取り入れておかなかったのは悔やまれた。しかし、現実的には、学生が望んでいるのは、「日本語話者とのコミュニケーションを持つこと」であり、それが、スケジュールに書かれている、「文法積み上げ型」の授業の形態とうまく連動するとは考えにくい。そして、30 人以上のクラスに 2-3 名の日本語話者の学生が数回来て

くれただけで、全ての学生が満足できる環境が作れるはずがないことは、実際に15回、クラスにボランティアを受け入れて痛感した。30人のクラスであれば、10人日本から学生が来てくれるなら、日本語話者とカナダの学生の割合は1対3になるので、もう少し接触の場面は増えることになるので、満足する学生の数は増えそうである。しかし、40人の学生を相手に、オンライン上で、50分で失敗なく授業を展開し、スケジュールに書かれている内容をこなすには、かなりの経験が必要であることは想像するのは難しくはない。結局のところ、現時点では、数人のボランティアに時々入ってもらうことで、授業にリズムをつけること以上を期待するのは難しいのかもしれないと感じている。

ところで、発表者は2021年5月にバーチャルエクスチェンジプログラムを実施し、日本の学生とのカンファレンスや交流クラスを8回実施した。このプログラム実施に際しては、大学からの支援が多くあり、テクノロジー専門のアシスタントと、クラスアシスタントを雇うことができた。発表者はこれまで、そのような贅沢な環境で教えた経験はなかったが、この経験により、痛感したことがある。それは「テクノロジー専門家とアシスタントの予算が取れるならば、オンライン上での学びの可能性を広げる可能性は無限に広がるであろう」ということである。もちろん、授業を担当する教員のテクノロジースキルがどの程度までであるのかということも大事ではあるが、移動によるコストがかからない分をうまく人材育成や人材確保に充てられるような仕組みが早急に構築されることが望まれる。

本発表の経験をベースに実施した、バーチャルエクスチェンジプログラムの報告は、別の機会に発表予定である。また、2005年から続いてきた、グループエクスチェンジプログラムの2022年度の申請も通り、来年5月の実施が決定した。このプログラムの募集は2021年9月に開始予定である。通常、日本へ行くまで、日本にいる学生とカナダの参加者(20名)との接触は設定したことがなかった。しかし、今回は、大学の授業時数の規定が許す範囲内で、出発前に非同期での交流も含めた、オンラインでの交流の機会を設定したいと考えている。発表者は、いずれは、COIL (Collaborative Online International Learning)を実施してみたいと考えており、ボランティア受け入れとそれに続く、バーチャルエクスチェンジプログラムの実施で、その可能性を感じることはできたのは大きな収穫であった。今後も、バーチャルエクスチェンジに関するテーマで議論できる場を提案できるよう努力を続けたいと考えている。そして、何よりも、語学教育の実践者として、研究に基づく知見を取り入れながら、一人でも多くの学生が元気に人生の次のステップを見つける手伝いをしたいと思っている。

最後に、このプロジェクトに参加いただいた、清泉女学院大学関係者に心から謝意を表したい。

参考文献

独立行政法人国際交流基金、磯村一弘、藤長かおる、久保田美子、伊藤由希子 (2016) 『まるごと 中級1』、三修社

坂野永理、池田康子、大野裕、品川恭子、渡嘉敷恭子（2011）『げんき
第2版』, 327 – 328 Japan Times

参考 URL

ボイスサンプルプロジェクト. Retrieved September 4, 2021, from
[https://sites.google.com/view/voicesampleproject-
making/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0](https://sites.google.com/view/voicesampleproject-making/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0)
COIL (Collaborative Online International Learning). Retrieved September 4, 2021,
from <https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/COIL/>
Google Slides. Retrieved September 4, 2021, from <https://www.google.ca>
Jamboard – Google. Retrieved September 4, 2021, from <https://jamboard.google.com>
Padlet. Retrieved September 4, 2021, from <https://padlet.com>
Wheels of Names. Retrieved September 4, 2021, from <https://wheelofnames.com>